

フランス文学研究室 NEWS

令和元(2019)年5月1日
第7号

この号の内容

- 1 イベント報告
- 2 在 student 数
- 3 修了生進路
- 4 特集
東北大学フランス語映画プロジェクト
《 Qui suis-je (わたしはだれだ)? 》
監督インタビュー
- 5 学部生の声
「初めてのフランス, 大学のフランス語」
- 6 受賞者の声
第50回フランス語弁論大会
優勝者・準優勝者より
- 7 大学院生の声
「国際シンポジウム研究発表」
- 8 編集後記
- 9 ホームページのご案内

イベント報告

2018年10月5日

深井陽介先生(高度教養教育・学生支援機構)映画プロジェクト
「わたしはだれだ?」第1話公開

2018年11月1日

アレクサンドル・ジェファン氏(パリ第三大学教授)講演会
「フランス現代文学と治療」

2018年11月21日

レイラ・スリマニ氏
(『ヌヌ 完璧なベビーシッター』2016年ゴンクール賞受賞作家/
マクロン大統領フランス語圏個人代表)との討論会
「レイラ・スリマニを囲んで」

2018年12月14~16日

阿部宏先生主催 シンポジウム「語りと主観性: 自由間接話法とその他」

2019年3月7,8日

グルノーブル・アルプ大学との共催国際シンポジウム《 Les Valeurs de l'Autre 》

2019年3月23日

映画プロジェクト「わたしはだれだ?」第2話公開

在 student 数

学部生 9名 / 博士前期課程 6名
研究生 3名 / 博士後期課程 5名
計 23名

卒業生・修了生進路

- ・中学校教員
- ・スズキ株式会社
- ・東北大学博士後期課程進学
- ・東北大学文学研究科専門研究員

特集 東北大学フランス語映画プロジェクト

《 Qui suis-je (わたしはだれだ)? 》 監督インタビュー



仙台を舞台とした探偵映画《 Qui suis-je ? 》第2話が2019年3月に公開された。本映画は深井陽介先生のプロジェクトであり、フランス語を学んでいる学部生が中心となって制作したものだ。さっそく、監督である北村太一さん(経済学部4年)にインタビューを行った。

——北村さんは監督、つまり皆をまとめるリーダーとして活動されています。今回、なぜ監督を引き受けたか教えて頂いてもよろしいですか。

北村 はい。当初は乗り気ではなく、押しつけられた記憶があります。「プロジェクト内で最高学年だし良いよね?」「は、はい,,,」こんな感じでした。興味本位で参加したのに気づいたらリーダー。なんとかなる精神で生きていた私は、このときもなんとかなると思っていました。

——そうだったのですか。第2話を観ました。撮影場所が学外まで広がり、杜の都・仙台を象徴する定禅寺通での撮影もあって、第1話に比べてより完成度が高い印象を受けました。

北村 ありがとうございます。皆の協力もあり無事完成はしましたが、私の予想を超えた仕事量でした。

——具体的にはどういった仕事をなさったのですか。

北村 監督として脚本、ストーリーボード、撮影、広報など全てに参加する必要がありました。他の役職と圧倒的に違うのはコミット量だと思います。12月は脚本の完成に向けて3回ほど徹夜しました。(次頁へ)



——全てに関わっていくのですね。3回も徹夜になるほど仕事量が膨大では、監督に選ばれたことを後悔なさったのではないですか。

北村 とても大変ではありましたが、今思えば、監督というポジションでこのプロジェクトに関わることができて良かったです。今までの私は、自分は頑張っているからここまでやれば良いよね、と自分に言い聞かせて、ストッパーをかけて過ごしていたと思います。もちろんやることはやっていたので怒られることはなかったですが、今回、良いものを作るにはそれではだめだと気づきました。全部が中途半端になるからです。そこで、私の最大限の労力をこのプロジェクトに費やし、なんとかしようと考えました。

まだまだ反省すべき点はたくさんあります。私自身未熟な点もたくさんあると思います。しかし、自分一人で成り立つものではないからこそ、大きな達成感を感じております。今後とも続いていくプロジェクト、なんとかなる精神ではなく、なんとかする精神で頑張っていきます！ 皆さん、応援よろしくお願いします。



撮影現場で撮影班と打ち合わせをする北村さん（右側）

★1頁「NEWS」タイトル左のカバー写真は、第1話の実際の映像。



<https://youtu.be/K9EwzbKvDCw>

映画のアドレスはこちら↑

学部生の声 初めてのフランス、大学のフランス語

ANAによるバリ旅行券に当選し、初めてフランスに行く機会を得た岡本君。

今回の感想と、その体験を踏まえ、大学における今後のフランス語教育に期待することを伺った。



僕は2月中旬から3月初旬にかけて初めてフランスを旅してきました。その中でもフランスでの滞在についての体験と、今後フランス語教育で行ってほしいポイントを述べさせていただきます。

まずはフランスでの体験についてです。フランスは当たり前ですが日本とは大違いでした。路上駐車用に車線が設けられている、コンビニは無いが薬局が多い、スリ・詐欺師がうろついている……などなど。中でも最も印象に残っているのは「他人への関心」です。例えば、日本では他人が街中で困っていても声をかける人はほとんどいません。一方、フランスの人々は周囲の状況・他人をしっかり見えています。そのため、困っている人がいると親切に助けてくれます。自販機の使い方や電車の乗り方は、見知らぬフランス人が手取り足取り教えてくれました。大感激です。また、現代の日本人には精神的な余裕が残っていないということを痛感しました。

そしてもう一つ。世の中にはいい人もいれば悪い人も存在します。フランスに行ったら最も警戒してほしいことがスリ・詐欺師・乞食です。彼らは普段何食わぬ顔をして街を歩いていますが、ターゲットを見つけると豹変します。これでもかというほどしつこく付きまとってきます。最も悪質な手口は、四人組の女性が *Can you speak English?* と尋ね、こちらが *No.* と言ったにもかかわらず、*Thank you!* と二人が両腕に巻き付き、もう二人がポケットとバッグに手を突っ込んでくる手口です。幸い何も取られませんでした。ご注意ください。

最後に、フランス語教育において今後行ってほしいことについて。（普段、あまりこの視点を意識しない僕が一人前に意見するのは大変恐縮ですが、敢えて言わせていただくと、）僕は日本にいながらフランス社会の現状を細部まで知ることができたらいいなと感じています。日本にいて、フランスで事件が起こればその事実は知ることができますが、その裏にあるフランス人の心理的・社会的背景まで察するのはフランス事情に精通していないとなかなか難しいからです。この点を今後のフランス語の教育で、教えて頂けたら嬉しいです。

（文学部行動科学2年 岡本祐伍）

受賞者の声 第50回フランス語弁論大会〈優勝者より〉

2018年11月10日、京都外国語大学にて第50回全日本学生フランス語弁論大会が開催された。本学からは島山佳子さん(経済学部3年)と武田秀祐さん(文学部仏文3年)が出場した。

1次審査を経て2名とも決勝に進出し、2次審査の口頭試問の結果、島山さんが見事優勝(在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本賞)、武田さんも準優勝(在日ベルギー大使館/京都外国語大学総長・APEF賞)に輝いた。

本大会は、学生対象のフランス語弁論大会として唯一全国規模のものである。

こんできた問題を深く考え直すことによって、自分の悶々とした思いに決着をつけることができました。そのためこの大会はフランス語能力向上の点でも、また自分自身の成長という点でも大きな転換点となりました。そして今回副賞として、大阪・東京ーパリ往復航空券、ブルゴーニュ大学国際フランス語研修センター提供の国際フランス語講座受講資格を獲得しました。春休みを利用して、1ヶ月の短期留学を経験しました。まだまだ自分のフランス語能力は不十分だと痛感するとともに、外国語を学ぶことの楽しさを見いだすことができました。これらの貴重な経験を生かして、さらなる高みに到達できるよう、努力していきたいと思えます。

(経済学部3年 島山佳子)

〈準優勝者より〉

2018年11月10日、京都外国語大学主催第50回全日本学生フランス語弁論大会に出場した。フランス語を勉強している日本中の大学生25人余りが一堂に会し、それぞれの体験や考えをもとに7~8分程度フランス語で弁論を行うというものだ。東北大学フランス文学研究室出身、現在同大学でフランス語を指導している深井陽介准教授や、同大学大学院医学系研究科緩和医学分野教授の井上彰教授、さらには家族、友人など周りの人たちのご協力のご支援により、見事準優勝という華々しい成績を収めることができた。この場をお借りして感謝の意を表明したい。

大会では「終末期医療と対話」というテーマを扱った。昨年4月に他界した祖父が生前病院から受けた対応に不信感を抱き考え始めた問題だ。高齢者が確実に増加していく社会でいかに人生最後の時期を充実させることができるのか、それを患者、家族、医師という三者の視点に立ち、「三者の相互的な会話」という点にフォーカスを当て論じた。

発表までの道のりは長く険しいものだった。原稿の暗唱という条件が課されていたため、自宅や大学さらには通学中の電車の中で紙が擦り切れるまで練習を繰り返した。また自らの発表姿を録音・録画することで、発表時の立ち振る舞いを正し、発音・アクセントの癖を矯正した。

当日は審査員の前で一次審査の発表と二次審査の質疑応答を行った。審査中は鬼の形相に見えた審査員も、大会が終われば気さくに話しかけてくれる人たちばかりで安心したことを覚えている。

本大会に出場したことはフランス語学習への更なる動機を与えた。私よりもフランス語を話せる人もいたし、私が知らない情報を与えてくれた学生や審査員も多くいた。ここで得た経験と人脈を活かすかは今後の私次第となる。今後の不断の努力をここに約束し、本稿の結びとさせていただきます。

(文学部仏文3年 武田秀祐)



★執筆者の学年表記方法の変更について

これまでの「NEWS」では、各執筆者の学年は前年度のもの(「NEWS」が扱う内容に相当)を表記しておりましたが、本号より、「NEWS」発行時点の現在の学年を表記致します。

大学院生の声 国際シンポジウム研究発表

2016年から行われ、今回で3度目となる東北大学とグルノーブル・アルプ大学との共催による国際シンポジウムが3月にグルノーブルで行われた。今回は研究発表を目的としたシンポジウムの他、フランス語の短編映画製作プロジェクトに参加している学部生がFLE（フランス語教授法）のクラスでプロジェクトについて紹介するという企画もあり、黒岩先生の引率のもと、仏文研究室の院生2名と映画プロジェクトメンバーの学部生4名がグルノーブルで10日間を共に過ごした。

実は、去年の研究室NEWSの留学記で書かせてもらったのだが、私は修士1年時にグルノーブルで交換留学をしたため、この地を訪れるのは二度目だった。相変わらず山しかない、のどかなグルノーブルであったが、留学時代に知り合った友人達や、お世話になった先生方、謎の共同生活を送ったマダムとも再会でき、着いた途端にすっかりバカンスモードになってしまっていた。緩んだ気を引き締めつつ、発表の最終チェックを行い、今回のメインイベントとなるシンポジウムに挑んだ。

シンポジウムのテーマは「Les valeurs de l'autre : 他者の価値(観)」というもので、このテーマのもと、文学、言語学、哲学、社会学など様々な分野の発表が行われた。使用言語はフランス語・英語となっていたが、仏語仏文関係ではない参加者も多かったため、英語での発表が推奨され、フランス語で発表する場合も英語のスライドの作成が義務付けられていた。そのため、「英語なんて本気出せばできる！」と高を括っていた仏語学生(私)にはなかなか厳しい経験ともなった。もはや、仏語仏文専攻であっても英語からは決して逃げられないようである……

さて、肝心の発表はというと、初めてのフランス語での研究発表ということもあり、想像していた以上に緊張し、噛みまくり。準備不足、練習不足など反省点もあるが、反省しても仕方がないので、ここでは前向きなことだけを書く。まず、今回、外国語で自分の研究について話すことで、母語の日本語で曖昧に濁してきた、不明瞭な点を浮き彫りにすることができた。小難しい表現を使えない外国語だからこそ、誤魔化しがきかなくなり、自分の論の弱い部分がよく分かった。あとはやはり、修士課程のうちに国際シンポジウムでの発表ができて非常に良い経験になった。いつも自分に言い聞かせていることだが、学生のうちは失敗して失うプライドも何もないのでやったもん勝ちであり、基本的に何をやっても得るものしかないのである。今回もやはりそうだった。この国際シンポジウムの他にも、東北大は様々な機会を提供してくれるので、後輩の皆様も是非このような機会をフル活用して頂きたい。

(文学研究科仏文博士後期課程1年 牧彩花)



編集後記

本号の編集作業の大部分は、博士前期課程1年の佐藤圭一郎君が引き継いでくれた。彼は謙虚にも、編集後記の執筆権を私に譲ってくれたのであるが、魅力的な人選をし、また私にはなかった柔軟な発想で、インタビューという新しいコンテンツをも生み出してくれた。仏文研究室の枠を超えて、フランス語を学ぶ他学部の学生から寄稿の快諾を得たのも、彼である。佐藤君に、深く感謝申し上げたい。

いまメインでの編集を離れた立場から、新鮮な気持ちで皆さんの原稿を読み、刺激を頂いている。私もまた、個人的研究とフランス文学・フランス語の広報の両立に本年度はますます勤しむ所存である。

(博士後期課程3年玉田優花子)

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

シンポジウムや講演、映画プロジェクトなど、多くの情報を随時更新中です。

是非覗いてみて下さい。

「フランス文学研究室NEWS」に関する

ご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

Email : issa3511@gmail.com